

国際協力特別賞

僕が今、学ぶ意味

東大寺学園中学校 2年

平林 広祐

テレビ画面に映しだされたのは、一昨年の4月に起こったネパール大地震で被害を受けた街の様子だった。僕は思わず、その光景に目を奪われた。

そこで活躍する1人の日本人男性が居た。国際災害ボランティアの吉椿雅道さんだ。吉椿さんは神戸にある団体に所属し、世界各国の地域で様々な復興支援に取り組んできた。ネパール大地震の発生後すぐに現地に向かった吉椿さんは、山岳地域にあり、支援も行き届かない村での住宅再建プロジェクトを立ち上げた。地元の大工さんに耐震技術も学んでもらいながら自分たちの村を再建するという構想だ。

僕はその番組を見て、現地に何度も足を運び、被災者の声に寄り添いながら復興を後押しする吉椿さんの行動力に深い感銘を受けた。同時に、僕は将来世界の人々のために何が出来るだろう、どうすれば役に立てるだろう、と考えさせられた。吉椿さんが今のような活動に取り組むきっかけとなったのが阪神・淡路大震災の経験であり、そこで災害ボランティアを一生の仕事と決めたそうだ。僕にはそうした災害に遭遇した経験もなく、被災地域にも行ったことがない。だから災害活動に対する支援といっても、なかなかイメージが湧かない。吉椿さんのような直接的な活動以外にも将来、自然災害に関する支援が出来ないかと考え、調べてみた。

ある新聞の記事では、日本は世界有数の「自然災害大国」であり、その発生の仕組みを探り、被害の抑制につながる研究で世界の先頭を走っている、ということが分かった。例えば、日本で発生する地震や火山活動の観測データを活かし、海外の研究者との共同研究などが盛んに行われており、高性能のコンピューターを使った模擬実験により、災害時の円滑な住民避難や経済被害の推定などにも取り組んでいるとのことだった。

僕は吉椿さんのような活動以外に、こうした自然災害大国の日本ならではの研究を通じて災害を予測したり、被害を抑えたりするような活動も十分立派な国際支援につながるのではないかと考えた。

将来、このような研究に携わるためには、理科の専門知識が必要だし、各地域の地理や歴史も学ぶ必要があるだろう。また、海外の研究者と協力して課題に取り組むためには高い英語のコミュニケーション能力が必要になってくるだろう。

今まで僕は、日々の学習が大切であると思っていたが、それが将来の自分にとってどのように役立つのか、あまりイメージを持てていなかった。しかし、今回の吉椿さんの活動や調べたことを

通じて、普段学校で学んでいることが世界中で今なお苦しんでいる人々を救い、お互いに支え合う未来の世界を作り上げていく、その第一歩になるのだ、と確信した。